第２２２回　酒田市立資料館企画展

郵便制度１５０年　郵便と酒田

展示期間　令和３年９月１１日（土）～１１月２３日（火）

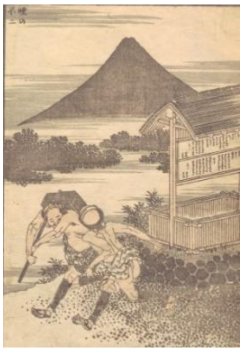
明治４年（１８７１）に日本で郵便制度が始まってから、今年で１５０年を迎えました。これに合わせ、明治から現代までの文書や写真などの資料から、郵便が伝える酒田の歴史・風俗を紹介します。

郵便制度にまつわる資料のほか、酒田ゆかりの著名人の手紙や葉書を含め、明治時代以降の酒田の人々の書簡を展示します。手書きで綴られた手紙・葉書は、その時代の様相を伝えるだけではなく、それを書いた人の人柄や心情にふれることができる奥深さがあります。

また、酒田郵趣会会員の方々などのご協力により貴重な郵便コレクションも展示します。

【　飛脚の時代から郵便の時代へ　】

明治時代に郵便制度が始まる以前、書状や荷物の運送は飛脚業者によって行われていました。その利用料金は高く、一般民衆にとっては容易に利用できないものでした。速く、安く、だれでも一定の条件のもとに利用できるように整備された郵便制度の始まりとともに、飛脚業者は３００年来の仕事を終えることとなり、貨物輸送に従事するようになりました。



（右画像：葛飾北斎「富岳百景」暁の富士（部分）／国立国会図書館蔵）

日本と酒田の郵便の歴史

日本の郵便制度は、明治４年(１８７１)１月に官営として発足しました。欧米を視察し、日本への郵便制度導入に尽力した駅逓頭・前島密は、日本近代郵便制度の父として知られており、現在でも１円切手にその肖像画が使われています。

郵便創業当時に取り扱われた郵便物は封書のみで、料金も距離によって差がありましたが、明治６年(１８７３)４月からは全国一律の料金となり、同年１２月にははがきが登場しています。郵便に関する制度は利便性の向上のために何度も改正を重ねており、欧米並みの水準に達し、全国的に普及したのは明治２０年代の終り頃とみられます。

酒田では、明治５年(１８７２)７月に本町に「酒田郵便仮役所」が置かれ、郵便事業が始まりました。明治６年(１８７３)３月には本町の渡辺久右衛門宅に「酒田郵便取扱所」がおかれ、その後伝馬町の白崎良弥が郵便取締役を務めていた明治８年(１８７５)に、「酒田郵便局」と改称しています。

展示では、明治５年に駅逓寮巡回官員に提出した「郵便酒田取扱所細目」（野附文書、酒田市立光丘文庫蔵）を紹介しています。同書には、鶴岡や吹浦など酒田周辺の駅までの距離や、脚夫による輸送の所要時間などがまとめられています。

明治２９年(１８９６)、当時としてはモダンな木造２階建ての洋風庁舎が本町五丁目に新築落成しました。当時は全国的に郵便局と電信局の併合が進められており、「酒田郵便電信局」として

郵便業務と電気通信業務を行うようになりました。明治３６年(１９０３)に「通信官署官制」の公布により名称を「酒田郵便局」と改称しています。明治４１年(１９０８)の官報から、酒田郵便局が電話加入したことや、電話交換業務を開始したことが確認できます。

昭和１３年(１９３８)、本町五丁目に庁舎が新築されました。鉄筋コンクリート３階建ての近代的な建物は、東北地方でも珍しいものでした。昭和２４年(１９４９)に逓信省が郵政省と電気通信省に分離したことで、電信業務が郵便局から分かれます。昭和５５年（１９８０)、酒田郵便局は新井田町へ移転し、現在に至ります。

最初の酒田郵便局（酒田郵便電信局）

明治４０年（１９０７）
～大正７年（１９１８）

画面左手に、本町五丁目にあった木造２階建ての酒田郵便局が写っており、局舎の手前には郵便配達の車を　引く配達員の姿が見えます。

二代目の酒田郵便局舎

酒田郵便局舎新築記念絵はがき／昭和１３年(１９３８)

昭和５５年（１９８０）に新井田町へ新築移転した酒田郵便局舎

酒田郵便電信局集配人

明治３５年(１９０２)

前列に座る人たちの足元を見ると、履物は足袋とわらじがほとんどです。写真の裏面には氏名と年齢が書かれており、１５歳から４２歳までの幅広い年代の人が従事していたことが分かります。

酒田郵便局新築時の集合写真
昭和１３年(１９３８)

撮影場所は局舎の正面玄関前で、玄関右手の壁に「酒田郵便局」とあります。制服の足元にゲートルをまいた人もおり、集配人たちの集合写真と思われます。

引札　郵便物早見と美人
明治４０年（１９０７）頃～大正時代

引札とは、江戸時代以降使用されていた広告物で、明治時代以降は浮世絵のように華やかな引札が、商家から得意先への年賀の贈答品として配布されました。
この引札は善導寺小路（現在の相生町）の商店が出したもので、画面中央には「郵便物早見」の表がついています。

引札　郵便配達
明治３６年（１９０３）

上中町の田中商店が出した引札で、郵便配達員と朱色の丸型ポストが描かれています。電話をかける少女や鉄道、蒸気船など、文明開化の時代を象徴する図柄の引札です。

手紙やはがきから見る歴史・世相

酒田の人々が受け取った手紙やはがきなど、さまざまな書簡から、明治時代から現代までの出来事や世相を見ていきます。

その人の言葉で綴られた手紙やはがきには、書いた人の心情や人柄に触れるような奥深さがあり、歴史的な出来事をより身近に感じさせてくれます。

軍事郵便

日清戦争時の明治２７年(１８９４)に制定された「軍事郵便取扱細則」を契機に「軍事郵便」が誕生し（※)、太平洋戦争終結後の昭和２１年(１９４６)２月まで運用されました。軍事郵便とは、戦地やそれに準じた場所から、軍の許可を得て出された郵便物と、家族などから兵士へ宛てた郵便物のことを言います。兵士が出す郵便物の料金は無料とされました。展示している軍事郵便は、いずれも日露戦争時に交わされたものです。

日露戦争時には、書状、郵便葉書、月１回以上刊行する定期刊行物、書籍、印刷物、写真が通常郵便に定められ、小包郵便物も取り扱われました。また、軍にひとつ野戦郵便局が開設され、それぞれに郵便長が１人と監査２人がつくことが原則とされていました。

郵便物は、軍の機密が漏れないように厳重な管理下に置かれ、戦地の様子や戦局などを手紙の中に詳しく書き記すことは制限されていました。展示している郵便物には、「検閲済」という印が押されているものがあります。

（※）軍事郵便の土台となったのは、明治７年（１８７４）に制定された「飛信逓送規則」とされます。軍および各省庁が非常時に用いる特急郵便の制度であり、西南戦争などの内乱時に利用されました。展示では、個人所蔵の「飛信逓送切手」を紹介しています。

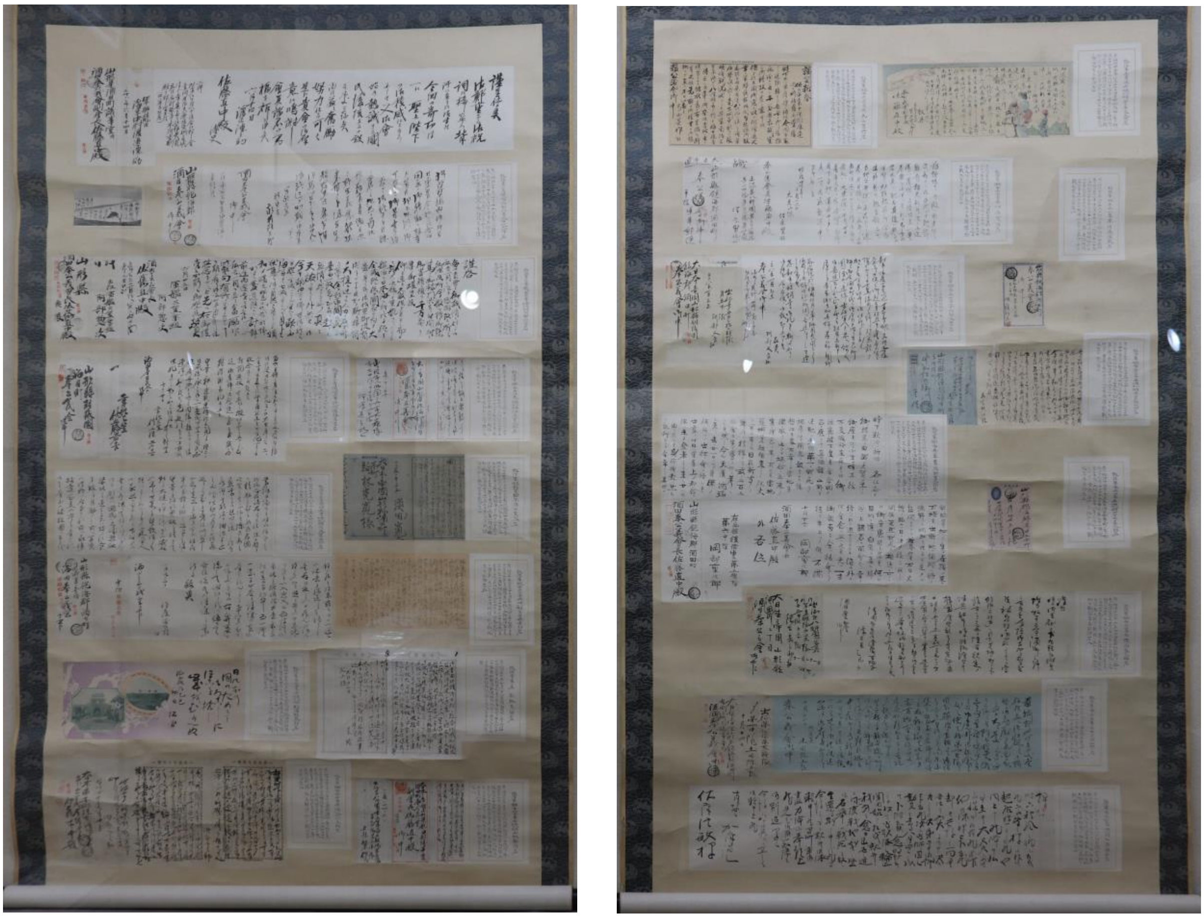
日露戦争戦没者が酒田奉公義会に送った手紙

明治３７年(１９０４)

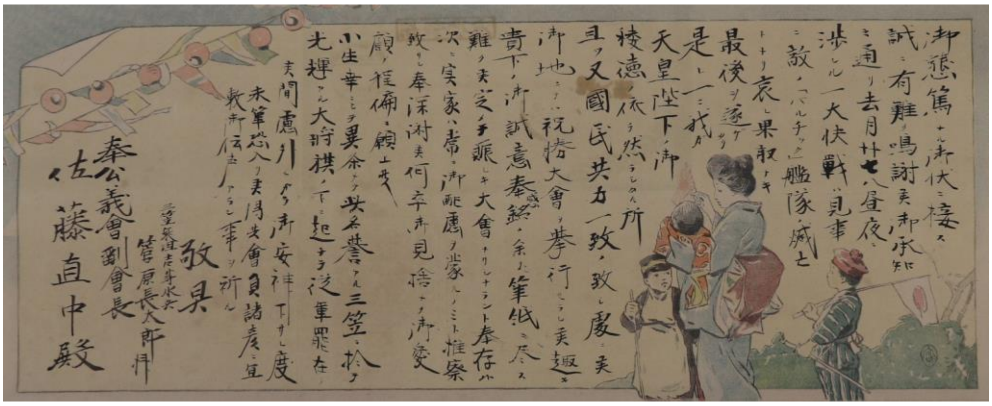
日露戦争が始まった明治３７年(１９０４)、酒田町に「酒田奉公義会」が設立されました。戦没者遺族や留守家族の生活を支援し、出征軍人を慰安することを目的とし、町民を挙げて事業に取り組みました。

展示している掛軸は、奉公義会が出征兵士に送った激励の慰問文に対する礼状のうち、戦没者４１人（酒田以外の戦没者９人を含む）の分をまとめたものです。礼状には戦地での近況報告や酒田にいる家族への思いがつづられ、一通一通に故人の軍歴が添えられています。この２幅のほかにもう２幅あり、合わせて４幅の掛軸にして保管されています。

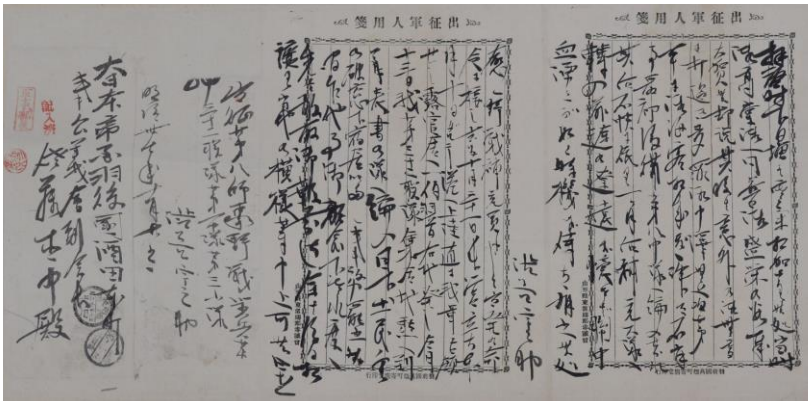
『酒田市史　改訂版（下)』によると、日露戦争には、飽海郡から現役・予備役など合わせて１,９６６人が出征し、１４４人が亡くなっています。そのうち酒田町出身者は３６人。そのほぼ全員の手紙がこの掛軸に残されています。



展示している掛軸　全体



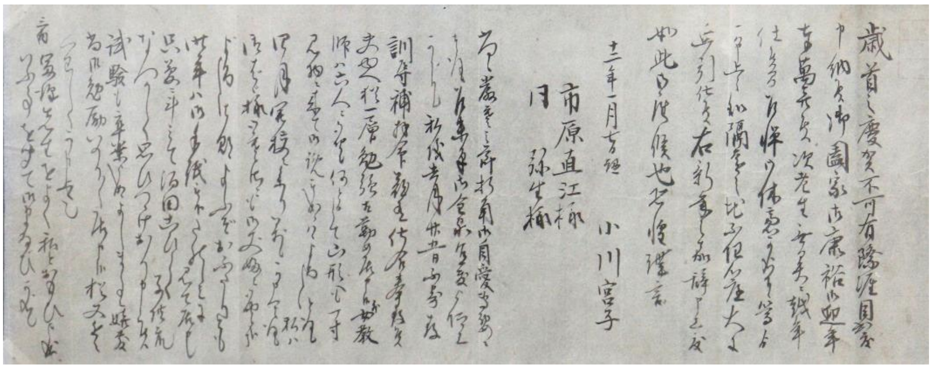
菅原長太郎の手紙



渋谷宇之助の手紙

酒田で最初の女性教師・小川宮子が
教え子の市原直江・弥生に送った年始のあいさつ状

明治１２年(１８７９)



小川宮子

明治５年(１８７２)、日本初の近代学校制度である学制が公布されると、酒田でも多くの小学校が設立されました。ちょうどこの年、東京で知り合った宮野浦の素封家・佐藤東次郎に請われて移住し、酒田で最初の女性教師になったのが小川宮子です。

江戸旗本の娘として生まれた宮子は、和漢の書や礼法を学んだほか、茶道・華道・箏曲など諸芸に秀で、剣術もたしなんだといいます。幕府の御殿医に嫁ぎましたが、維新後に未亡人となっていました。

宮野浦では村立集会所で寺子屋を開き、明治７年(１８７４)に宮野浦学校(現在の宮野浦小学校)ができると教師になります。翌年、酒田県令･三島通庸に認められ、酒田最初の女学校である操松学校(後に琢成学校に統合)に、創立と同時に招かれました。同１１年に山形県師範学校(後の山形大学教育学部)が創立すると、三島の命により、同校附属小学校に勤務。三島が栃木県令になると、宮子も栃木県大田原町に移り住み、私塾を開いて晩年を過ごしました。

手紙は明治１２年(１８７９)、山形県師範学校に移って初めて迎えた正月に、教え子の市原直江・弥生姉妹に宛てた年頭のあいさつ状。酒田を懐かしむ気持ち、子どもたちへの愛情がつづられています。

絵はがき 酒田尋常高等小学校

明治

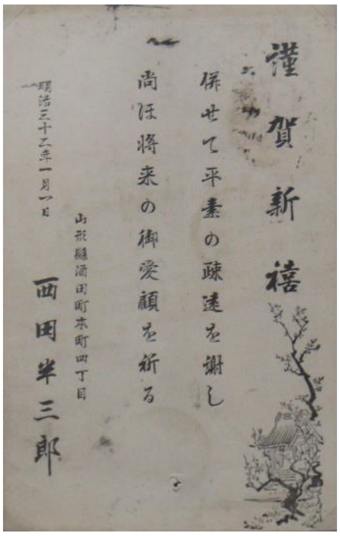
明治７年(１８７４)、鵜渡川原村(現在の酒田市亀ケ崎地区)に鵜川学校など２校、酒田町に天正寺学校、椒坊学校など５校の学校が設立。翌８年に小川宮子が勤務した操松学校など８校が設立されました。これら１５校がひとつになったのが、現在の琢成小学校の前身にあたり、「大学校」と呼ばれた琢成学校です。

琢成学校は明治１２年(１８７９)に、現在消防署がある本町通りの突き当りに開校しましたが、２度の火災に遭い、明治２１年(１８８８)に現在酒田市総合文化センターになっている寺町

泉流寺畑地に新築移転しました。昭和５０年(１９７５)に光ケ丘小学校と合併し、現在の琢成小学校になるまでおよそ１００年、この場所にありました。
新築移転時の校名は「酒田高等尋常小学校」でしたが、明治２５年(１８９２)に絵はがきに書かれた「酒田尋常高等小学校」に改称しています。

西田薬局店主・西田半三郎の年賀状

明治３２年(１８９９)元日

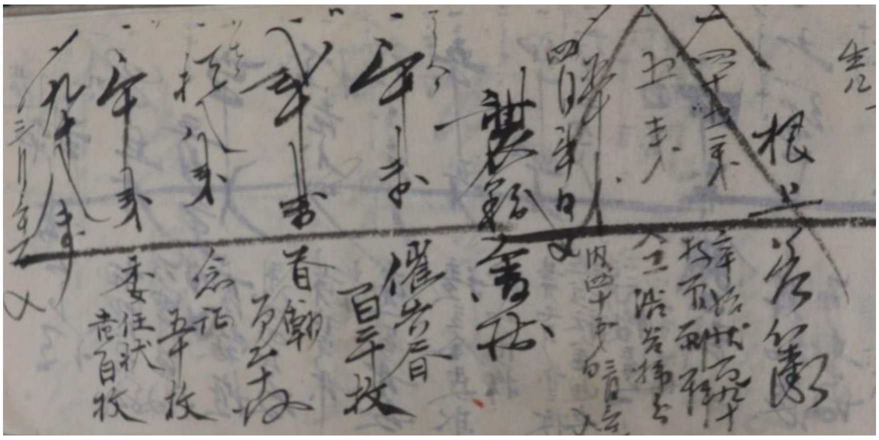


明治３２年(１８９９)１２月、年賀郵便の特別取扱いが始まりました。はがきによる年始のあいさつが年々増加し、一般のはがきと区別しないと対応ができなくなってきたためでした。この年は指定された局に限定して行いましたが、翌年からは全国で実施されました。明治３９年(１９０６)には年賀特別郵便規則が制定されています。

展示しているのは、特別取扱いが始まる前年の年賀状です。差出人は、酒田で江戸時代から１３代続いた西田薬局の１０代目・西田半三郎。手書きではなく印刷されていることから、得意客や取引先などに対してかなり多くの年賀状を送っただろうと想像できます。

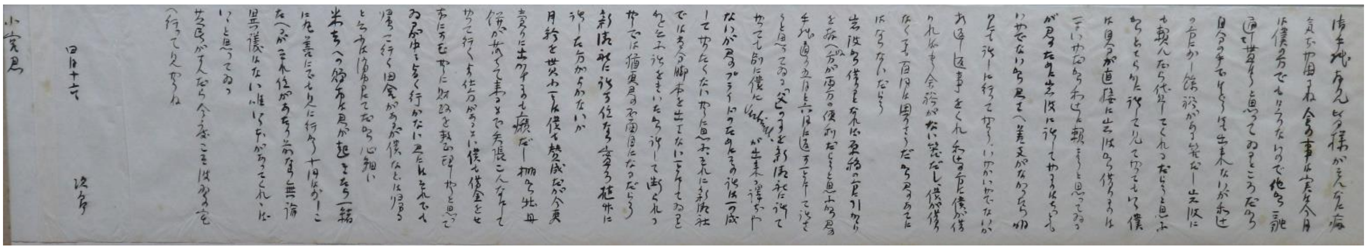
日賢家大福帳　明治３２年（１８９９）

酒田で印刷業を営んでいた日賢家の大福帳です。巻末の「付込」という項目に、個人の顧客からの注文が記録されており、「年始状」や「年賀状」と書かれています。酒田三十六人衆のひとり「根上善兵衛」の注文では、「年始状」が１９０枚印刷されていることがわかります。



酒田出身の哲学者・阿部次郎が
同門の小宮豊隆に送った借金の断り状（阿部記念館蔵）

大正４年(１９１５)



阿部次郎（阿部記念館蔵）

阿部次郎は飽海郡上郷村山寺（旧松山町地内で現酒田市）出身の哲学者で、明治４０年(１９０７)に東京帝国大学文科大学哲学科を卒業。明治４２年(１９０９)に夏目漱石の門下生となり、多くの文芸、哲学の論評を書きました。

この手紙は、当時多くの青年たちに「青春の書」として愛読された『三太郎の日記』（※）を発表した翌年に書かれたものです。

手紙の相手である小宮豊隆とは、同じ夏目漱石の門下生として交流を持つようになりました。小宮は夏目漱石の研究者としても知られる文学者で、『漱石全集』の編集にあたりました。漱石の著書『三四郎』のモデルとなったともいわれる人物です。また、文中に登場する「岩波」は岩波書店の創業者岩波茂雄、「和辻」は『古寺巡礼』などの著作で知られる和辻哲郎と考えられます。

手紙では、借金を申し込んできた小宮に対して、自分も余裕がなくて貸せないと断り、別の候補として和辻、岩浪を挙げて、どう頼むかについても提案しています。当時の若い文学者の日常の一端をうかがい知ることのできる面白い手紙です。

（※）『三太郎の日記』

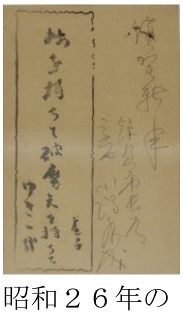
阿部次郎が最初に『三太郎の日記』を出版したのは大正３年（１９１４）のこと。明治４４年（１９１１）から大正３年にかけて、新聞や諸雑誌に発表した小編をまとめたものでした。大正４年（１９１５）に『三太郎の日記・第弐』が出版され、大正７年（１９１８）に２冊を合わせた『合本・三太郎の日記』が出版されました。およそ１０年間にわたる阿部次郎の内生記録を綴った思想書です。

川端康成から、阿部次郎の甥・阿部襄（のぼる）へ宛てた年賀状

昭和２５年（１９５０）と２６年（１９５１）

阿部記念館蔵

阿部襄は生物生態学者であり、昭和１４年（１９３９）から満州の吉林師道大学教授として勤務していました。昭和１６年（１９４１）、講演のために満州を訪れた川端康成を案内したことがきっかけで交流が始まりました。

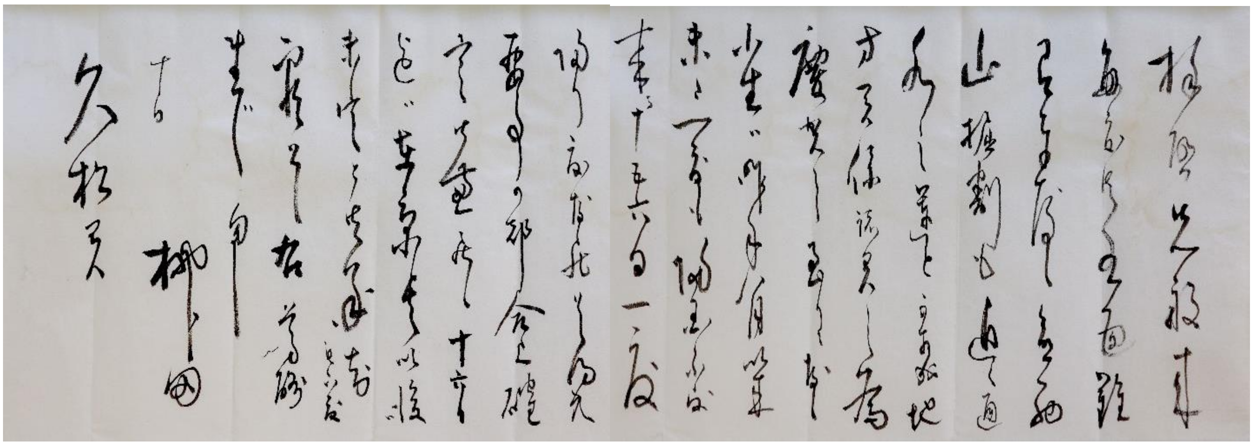


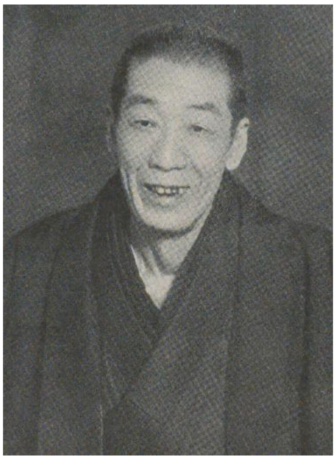
昭和２６年の年賀状

昭和２５年の年賀状

赤川新川掘削実現に尽力した榊田清兵衛が
西山掘鑿期成同盟会長・久松元祐に宛てた手紙

昭和２年(１９２７)頃





榊田清兵衛（国立国会図書館蔵）

現在の赤川は、大正から昭和にかけて行われた新川掘削(西山掘削)工事により、日本海へ直接つながる川として造られました。もともとは最上川の支流でしたが、合流点に近い広野村・袖浦村(現酒田市)は、江戸時代から洪水に悩まされ続け、本格的な改修が待ち望まれていました。

大正６年(１９１７)に最上川改修工事が決定すると、その付帯事業として赤川の拡幅工事が計画されましたが、そのために３０数軒の家屋が移転、２８０ヘクタールに及ぶ農地が削減させられることになりました。地元有志は削減縮小の陳情・嘆願を繰り返しますが、受け入れてもらえませんでした。

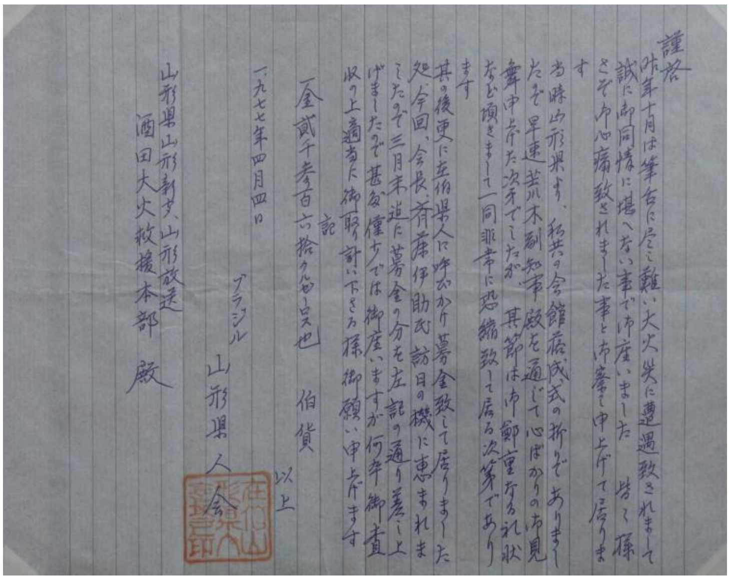
この苦境を救ったのが、工事のことを偶然聞いた秋田県大曲出身の衆議院議員・榊田清兵衛でした。榊田の国への熱心な働きかけと地元有志の陳情活動により、ようやく新川掘削が実現。昭和２年(１９２７)に通水し、昭和１１年(１９３６)には護岸工事を終了しました。
陳情活動中、榊田は地元の代表者と絶えず連絡を取り合っていました。この手紙は、西山掘鑿期成同盟会長だった久松元祐に宛てたもの。通水が始まるところまで工事が進んだことを祝う言葉が記されていることから、昭和２年に送られたものとわかります。

赤川新川掘削工事の様子（大正）

完成した赤川新川（昭和）

ブラジル県人会から寄せられた、酒田大火義援金の送り状

昭和５２年(１９７７)４月



謹啓
昨年十月は筆舌に尽し難い大火災に遭遇致されまして誠に御同情に堪へない事で御座いました 皆々様さぞ御心痛致されました事と御察し申上げて居ります
当時山形県より、私共の会館落成式の折りでありましたので早速荒木副知事殿を通じて心ばかりの御見舞申上げた次第でしたが 其節は御鄭重なる礼状など頂きまして一同非常に恐縮致して居る次第であります
其の後更に在伯県人に呼びかけ募金致して居りました処、今回、会長斉藤伊助氏訪日の機に恵まれましたので三月末迄に募金の分を左記の通り差し上げました 甚だ僅少では御座いますが何卒御査収の上適当に御取計い下さる様御願い申上げます
記
金弐千参百六拾クルゼーロス也 伯貨
以上
一九七七年四月四日
ブラジル 山形県人会
山形県山形新聞、山形放送
酒田大火救援本部 殿

▲ 封筒に押されている差出人名
「YAMAGATA-KENJINKAI DO BRASIL」

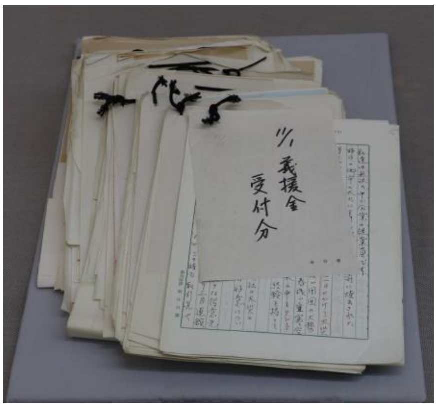
昭和５１年(１９７６)１０月２９日に発生した酒田大火。酒田市中心部の商業区域２２.５ｈａ、1,７７４棟を焼き尽くし、1,０２３世帯、3,３００人が被災しました。被害状況が全国に報道されると、全国から義援金や救援物資が次々と寄せられ、昭和５２年９月１４日までに届いた義援金は総額７９７,４２２,１１５円(約８億円)に上りました。

現在、義援金の送り状は資料館で保管しています。大蔵村役場を通じて出稼ぎ先の埼玉県から義援金を送ってくれた男性、大火の１０年前に火災に遭い多くの支援をもらったという会社の従業員など、さまざまな人がさまざまな気持ちを込めて、支援してくれていたことが伝わってきます。

義援金は海外からも送られてきました。展示しているのはブラジル・サンパウロのブラジル山形県人会から寄せられた義援金の送り状です。

義援金に同封された手紙の束

昭和５１年（１９７６）１１月



昭和５１年１１月の１か月間に酒田市に届いた義援金に同封されていた手紙。１日分ずつ綴じてあります。

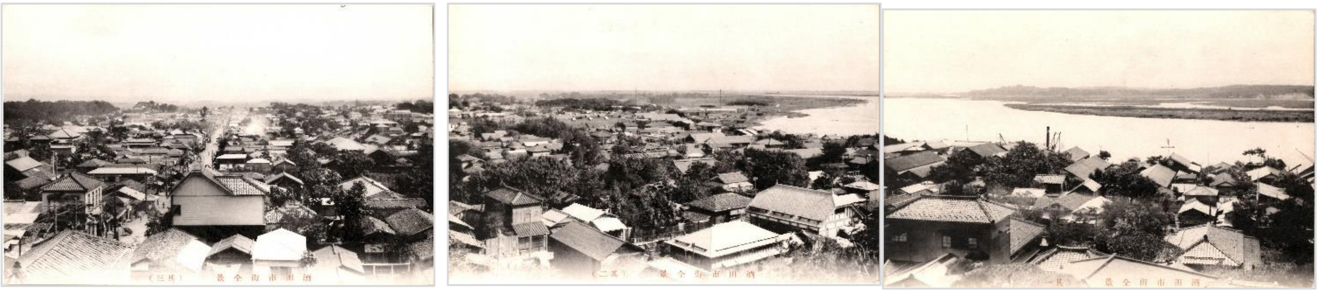
その他、個人所蔵の資料「連合艦隊司令長官・山本五十六が、酒田の米穀商・荒木幸吉に送った礼状」と「岸洋子が酒田の友人などに送ったはがき」、本間美術館画像提供の複製「本間美術館を訪れたヘレン・ケラーが本間家に送った礼状」を展示しています。

絵はがきが伝える昔の酒田

明治３３年（１９００）の郵便法施行により私製はがきが認可され、絵や写真を載せた絵はがきが制作・販売されるようになりました。明治３５年(１９０２)には万国郵便連合加盟２５周年を記念し、わが国初の官製記念絵はがきが発行されました。

明治３７年(１９０４)の日露戦争時には、戦局の進展に合わせて官製記念絵はがきが発行され一大ブームとなり、これをきっかけに日本中で絵はがき人気が高まります。遠方の様子を写真で伝えることが出来る絵はがきは、小さなメディアの役割も果たし、災害による被害や皇室行事などを伝える媒体としても浸透していきました。

酒田でも、景勝地や街並み、建物、行事を写した絵はがきが数多く出版されたほか、建物竣工や鉄道開通などの記念行事に合わせて絵はがきが制作されました。明治時代から昭和期にかけて発行された絵はがきは、昔の人々の暮らしを伝える貴重な資料となっていいます。



酒田市街全景絵葉書

昭和（戦前）

３枚組で、その名前の通りに３枚を並べると、最上川から寺町までを一望するパノラマ写真になります。日和山から見た景色と思われます

酒田港内ノ景/新版酒田十景

大正～昭和初期

新井田川（酒田港）

明治

酒田停車場/酒田線全通記念絵葉書

大正４年（１９１５）

酒田全景

明治末

日和山公園（観光の酒田）

昭和（戦後）

本町（官公町）/観光酒田

昭和（戦前）

おばこ踊絵はがき

大正～昭和（戦前）

第十七水雷艇酒田入港当日に於ける公衆

明治４２年（１９０９）

酒田日枝神社祭典の実況

明治末～大正初め頃

酒田高等女学校（運動会）

明治末